明治末期の新聞メディアのエクリチュール

—明治 40 年代朝日新聞連載小説を中心に—

Tseng Chiu-Kuei/ 曾秋桂

Department of Japanese, Tamkang University/ 淡江大學日文系教授

【摘要】

伴隨明治維新的西化運動，深具文明開化象徵意義的新聞媒體，傳進了日本。新聞、電視、網路等傳媒發達的 21 世紀的現今，傳媒的功過問題，常常被議論紛紛。更何況新聞是唯一的公開廣為傳播的資訊流通、交換工具的明治時代中，新聞媒體所擁有的影響效力之大，更是超乎生活在到處充斥資訊媒體的現代生活中的現代人們的想像。

回顧日本的新聞的發展史，朝日新聞社最初是個名不見經傳的小報社。於明治 41 年東京朝日與大阪朝日合併而成的朝日新聞，成為當時東京、大阪二大都會區中新聞發行制度完備、規模最大的新聞社。其中不餘費力延攬招募二葉亭四迷、夏目漱石成為朝日新聞連載小說主筆的主編池邊三山的大刀闊斧的改革之下，時代進入了新聞連載小說的第一期黃金時代。

根據先進指出：可以從文學概念的革新，與不因民族國家不同而產生迥然不同的國族意識激盪的近代形象等諸多的角度切入研究新聞連載小說。展望未來浩瀚無邊的研究方向，本論文擬先從釐清明治 40 年代的朝日新聞連載小說的書寫，邁出研究的第一步。具體以明治 40 年至 45 年間刊登於東京朝日新聞報上連載的 13 篇長篇小說為主要的考察材料，進行仔細的文本對照、比較、分析，進而統籌出新聞連載小說的大方位的書寫趨勢。

【Abstract】

In Westernization of Meiji, newspaper media were the symbols of westernization. It is argued about the merits and demerits of the mass media now of the 21st century. The power of the newspaper media of Meiji Era is mightier than the present age. In the history of newspaper development of Japan, Asahi Shimbun Publishing was a small newspaper. Asahi Shimbun merged the Tokyo and the Osaka Asahi in Meiji 41. Asahi Shimbun became the newspaper publishing company of that time maximum which has issue organization in two big cities in Tokyo and Osaka. In it, Ikebe Sanzan invited Shimei Futabatei and Sokeki, and reformed the campany. It was the first gold time of a newspaper serial novel. Precedence research shows the direction of serial story research from various angles. This study is aimed at 13 pieces of newspaper serial novels first serialized by Asahi Shimbun of the Meiji 40s. And this research analyzes, compares and contrasts the ecriture of a serial story, and shows the direction of research.

【關鍵詞】

新聞媒體、明治 40 年代、朝日新聞社、新聞小說、書寫

1. はじめに

産業化、近代化のもっとも明瞭な象徴[1]と言われる新聞メディアは、明治の西洋化に伴い、文明開化の象徴として脚光を浴びるようになった[2]。確かに、明治初期では新聞に対する民衆の認知度は、まだ低いものであった[3]が、明治 10 年の西南戦争が新聞に与えた影響は大きく、戦争報道によって新聞は広く読まれるようになった[4]。その中で、新聞メディアを個人が社会参与に活用したことは、貧しい生活をしながらも無理して新聞を購読した[5]樋口一葉にも見られる。新聞を読むことによって、一葉は日本共同体の一員として、「国民」としての自己形成・意見表明をし[6]、新聞を小説修業のために利用したのである[7]。また、新聞メディアの力が大衆教化、国民統合、娯楽享受などに及んだと述べる山田俊治の論究[8]がある。さらに、当時の新聞の本場、先進国のフランスでは、社会現象として機能を果たしていた新聞メディア[9]は、19 世紀的ナショナリズムの反映で、きわめてイデオロギー的な産物[10]でもあった。

新聞をはじめ、テレビ、インターネットが発達している21 世紀の現在でも、マスメディアの功罪がよく問われている。まして、新聞が唯一の共有機関紙として情報を流通し交換する手段だった明治時代においては、新聞メディアが持つ力は、現代を生きている現代人の想像を遙かに超えて、強大そのものである。これは、まさしく小森陽一が「メディアはもはや、単なる伝達の道具でもなければ、身体機能の拡張だけでも

---

[1] グレアム・ロー／森田典正(2003)「世界の新聞小説の歴史をめぐって」『文学』第4巻第1号岩波書店P46

[2] 佐藤かつら(2003)「明治初期における新聞と歌舞伎」『文学』第4巻第1号岩波書店P98

[3] 山本武利(1981)『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局P62。メディアを意図的に利用する点については、有山輝雄・高橋世織・十川信介・宮崎修多・紅野謙介(1998)「座談会出版文化と近代文学」『文学』第9巻第1号岩波書店P17では、有山輝雄の発言によると、明治維新を推進した人達は、メディアによって人を動かそう、大衆を動かそうという発想は最初から持っていなかった。メディアを作って、人を動かそうという発想を持ったのは、蘇峰や陸羯南の時からだそうである。

[4] 同前掲佐藤かつら論文P87

[5] 樋口一葉が『改進新聞』を購読した明治24年(1891)時点とは一致していないが、ちなみに、新聞購読の値段を参照に、ロバートキャンベル「一八八二、大新聞のるつぼ」『文学』第4巻第1号岩波書店P133に書かれた、明治15年に『同盟改進新聞』が誕生する際に、『同盟改進新聞』一部を二銭三厘、一ヶ月前金50銭で買える。そして、枚数が倍の『東京日日』の一ヶ月の前金85銭、『時事新報』と『自由新聞』の一ヶ月の前金65銭、『東京横浜毎日』一ヶ月の前金60銭で購読できるという資料を引用している。

[6] 成田龍一(1999)「新聞を読む樋口一葉」『文学』第10巻第1号P83

[7] 同前掲成田論文P84

[8] 山田俊治(2002)『大衆新聞が作る明治の<日本>』日本放送出版協会

[9] 小倉孝誠(2003)「娯楽とイデオロギー」『文学』第4巻第1号岩波書店P56

[10] 同前掲小倉論文P59

なく、メッセージそれ自体だけでもない。すでに人間の生活全体を覆う環境と化したメディアは、不断に自己と他者のいままでの関係を変えていく」[11]と指摘した通りである。

1.1明治40年代における朝日新聞社

十川信介によると、明治16年頃に出た『全国新聞／雑誌評判記』では、新聞を完全に大新聞と小新聞との二種類に分けて、大新聞では『東京横浜報知』『時事新報』などが代表で、小新聞では『読売新聞』が代表に挙げられるという[12]。その詳細は、大新聞が、大判の紙に印刷された高級論説紙で、新しく結成された様々な政党の機関紙的性格が強いのに対し、小新聞は、江戸時代からの大衆文化の伝統をうけつぎ、挿絵を載せ、小さめの紙を使った、雑記事の安価な集成版[13]であるという。その中で、絵入り、振りがなつき、婦女子にも読める小新聞[14]として、朝日新聞社は、明治12年に大阪で創刊し、明治21年から東京でも発行するようになった[15]。

特に、明治24年の国会開設までの時期、政党機関紙的性格を強くもった大新聞は、社説で政論を展開し、支持層の拡大を試みようとした[16]。それゆえ、この二種類の新聞を読む読者層の身分的な違いについて、小森陽一は、大新聞の読者は、政治と直接にかかわることの出来る「上等社会」に属する経済力のある層であるのに対して、小新聞の読者は、「下等社会」に属している者であるという認識が、明治社会の中で出来たと見ている[17]。しかし、日清戦争報道によってこういった「大新聞」と「小新聞」の情報的差違は無くなってしまったという[18]。さらに、明治30年代になると、大都市では小新聞系の諸紙がその部数を多く伸ばしていった[19]。

そうした中、「個性的な論説陣が、社説からも姿を消し、新聞が決定的に均質化す

---

[11] 小森陽一(2002)「まえがき—メディアという力」小森陽・富山太佳夫・沼野充義・兵藤裕己・松浦寿輝『岩波講座文学2メディアの力学』岩波書店P1

[12] 十川信介の発言である。富山太佳夫・十川信介・山田俊治・齋藤希史・ロバートキャンベル(2003)「座談会新聞小説の通路」『文学』第4巻第1号岩波書店P22

[13] 同前掲グレアム・ロー／森田典正論文P46

[14] 割田欣二(1979)「あとがき」朝日新聞社編『朝日新聞100年の記事にみる①』朝日新聞社P308

[15] 朝日新聞社編(1979)『朝日新聞100年の記事にみる①』朝日新聞社Px

[16] 小森陽一(1995)『漱石を読みなおす』筑摩書房P115

[17] 同前掲小森書P115

[18] 同前掲小森書P116

[19] 同前掲小森書P117

るのが、日露戦争の直前のこと」[20]である。また、戦争の故、「新聞が一戸一戸に配達されるシステムも、国民全体を巻き込んだこの日露戦争の中で確立され[21]」た。日露戦争を契機にして、各新聞社の発行部数が増加した[22]。

だが、日露戦争のために、一気に出来た戦争の情報を商品化する、流通と販売のシステムは、戦争後、情報商品の供給源が無くなってしまって、崩れてしまったのである[23]。また、「読者の特定の関心に依拠した政論新聞・小新聞から、より広範な読者を開拓する方向、政治イデオロギー的には「不偏不党」の方向に進んだ」[24]現状は、新聞社が今まで取ってきた方針の転換に拍車をかけた。

こういった経営が難しくなる状況において、朝日新聞社の池辺三山は、「夏目漱石、二葉亭四迷を迎えて文芸欄を向上させ、渋川柳次郎(玄耳)を社会部長に迎えて社会面を向上せしむるなど紙面全体の改革を実現した」[25]。新聞の中心的商品を政治的論説から小説に切り替え、娯楽性を主とした通俗的な新聞小説の体質改善[26]に成功した池辺三山は、朝日新聞社を報知新聞と同じように平俗化する運命から免れさせた[27]と評価されている。それは、明治 40 年に「漱石を招聘した朝日新聞社は、こうした新聞メディアの転換がもっとも典型的に表れている新聞社であった」[28]と言われるゆえんでもある。

以上、明治 40 年代に至るまでの日本の新聞が発展した流れを簡単に纏めた。この流れを辿ってみると、時代の流れとかみ合った朝日新聞社の発展史が分かった。朝日新聞社は最初に小新聞として出発し、経営危機に向かう度に、大きな変貌を遂げ、ついに明治 41 年に東京朝日と大阪朝日を合併し、全体として東京大阪二大都

---

20 同前掲小森書P117

21 同前掲小森書P122

22 有山輝雄(1955)「明治末期の新聞メディアと漱石」小島信夫・小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第5号翰林書房P88

23 同前掲小森書P122-125

24 同前掲有山論文P88

25 日本近代文学館編(1977)『日本近代文学大事典』第1巻講談社P88

26 遠藤祐(1994)「「朝日新聞欄」の主宰」宗田安正編『朝日新聞記者夏目漱石』立風書房P17では、「漱石もそれ(新聞小説の通俗性)・論者注)を意識していて、入社の際に自分の作は「今日の新聞に不向きと思ふ夫でも差支なきや」(明40.3.4づけ雪鳥あて書簡)と念を押している。それを承知で朝日が漱石登用に踏み切ったのは、鳥居素川や池辺三山に新聞小説の体質改良という意図があったからほかならない。結果として彼等の意図は、漱石を通して実を結び、おそらく新聞小説史に、新たなページをひらくことになったのではいなかろうか」とある。

27 同前掲『日本近代文学大事典』P89

28 同前掲有山論文P89

市で発行体制をもつ当時最大の新聞社になった[29]のである。また、小説が日露戦争後、新聞経営の主力商品になりうる状況[30]を先取りし、二葉亭四迷、夏目漱石を招聘した[31]池辺三山の改革により、新聞連載小説の第一次黄金時期[32]を迎えたのである。この、新聞連載小説の黄金時期[33]に、朝日新聞(東京)[34]に連載された新聞小説のエクリチュールがどのようなものかは、新聞の変貌を考える上でも大変に興味深いものであると言えよう。

1.2新聞連載小説と本発表が目指す方向

ロバート・キャンベルが述べている「本場イギリスやフランスの新聞からはとっくに姿を消した、新聞小説が『周縁国』日本にだけ根を下している」[35]という評価は、日本が積極的に取り入れた西洋文明が日本に定着したことの説明になると思われる一方で、前述した新聞小説の隆盛を促す日露戦争後の背景や、また新聞小説の起源を明治10年前後に始まった続き物とする見方[36]にも大きく関係していると言えよう。

さて、新聞小説に書かれた文章や文体についてであるが、佐藤健二は、新聞が生んだ新しい文章や文体を文学概念の変革に関わる積極的なものと見て、「日本文学の様式に及ぼした偉大な革命」[37]と規定している。

---

29 同前掲有山論文P89

30 同前掲小森書P125

31 漱石が書いた有名な「入社の辞」を明治40年5月3日付の朝日新聞社に発表して入社した。

32 浅井清(1994)「漱石と新聞小説」宗田安正編『朝日新聞記者夏目漱石』立風書房P46

33 同前浅井論文P47では、浅井清は昭和20年代を新聞小説の第二次黄金時代と見ている。

34 朝日新聞が日露戦争後、商品中心である戦争情報源がなくなったという経営危機を乗り越えて生き残った証拠としては、当時、新聞の発行部数が小新聞の代表である読売新聞を上回って、上昇したことが挙げられる。詳しくは、本論文の後に添付した付録資料を参照されたい。なお、佐々木徹著福田清人編(1993・1967初版)『人と作品24正宗白鳥』清水書院P43では、明治36年に『読売新聞』は美術新聞とまで言われるそうである。

35 同前掲「座談会新聞小説の通路」P2

36 小二田誠二(2003)「ニュース言語の江戸・明治」『文学』第4巻第1号岩波書店P70では、「日本の新聞小説は、明治十年前後、戯作者が関わった小新聞において事件報道を殊更に読み物化して連載した「続き物」と呼ばれる記事を起源とすると考えられる」とある。また、同前佐藤かつら論文P84では、「小新聞の雑報には、当時記者の中心でった戯作者によって戯作の文体が用いられ、雑報記事は次第長編化し、創作的部分も増加し、明治十年前後から「続き物」と呼ばれる連載記事となり、やがて新聞小説へと繋がっていく」とある。

37 佐藤健二(2006)「「新聞文学」と「戦争文学」」『國文學』第51巻第5号學燈社P93では、「新聞が生んだ新種の文章と文体こそが、日本文学の構築に欠かせないという、突き詰めていけば文学概念そのものの変革に関わる積極性である。「日本文学」の様式に及ぼした偉大な革命」であったとまでいう」とある。

また、文学概念の変革に積極的に関わる新聞を、19 世紀世界の一つの大きなメディアと考える際に、明治の新聞に表れる文学については、ここ 10 年間、近代メディア研究、女性学、アメリカ・イギリスの 19 世紀文化史等の分野から新聞が見直される中で、新聞と小説との関係を重視し視野を広げてみる必要があると、ロバート・キャンベルは示唆している[38]。今後の新聞メディア研究を取り扱う際に、その時代に置かれた意義や他の研究分野との重なり合いにも注意するよう心がけたい。

そして、メディアの研究方法についてであるが、宮崎修多が分析書誌学及びテクスト論を融合した視野の広い方法論[39]を示してくれている。指摘の通り、新聞小説の作者への視線は完全に無効ではないが、それよりも、書かれた時代性、同時代の新聞小説作家に共通に見られる同時代的言説をより重視すべきときがきている。

さらに、「小説の発生は連載発行の複雑な歴史、しかも、国家を超えた国際的な歴史と密接に関連していた。このことに着目するならば、アンダーソンやモレッティが思い描いたのとは異なる近代像、つまり民族国家を軸としたアイデンティティが、民族国家を超えた、あるいは、民族国家に依存しないアイデンティティとせめぎあう近代がみえてくるに違いない」[40]というグレアム・ロー、森田典正の発言により、メディア論に取り組む場合には、国境を越えた国際的視野を持つべきだという主張もある。

こういった研究動向を見通しながら、グレアム・ロー、森田典正は「新聞小説を読者論、作家論、文学形式論の立場から分析することができなかった」[41]ことや、「一次資料の十分な検証にもとづく研究書の課題」[42]が残っていると、現段階で行なわれている新聞小説の研究現状を反省し、真摯に今後の研究方針を示してくれている。

諸論が示してくれる示唆を得て、本論文では新聞メディア論や新聞小説論に向かって踏み出す第一歩として、まず明治 40 年代の朝日新聞連載小説を中心に、この時期の日本の新聞メディアのエクリチュール探究への見取り図を示すことを目的にし、今後の具体的探究への方向性を提示したい。

---

[38] 同前掲「座談会新聞小説の通路」P3

[39] 同前掲「座談会出版文化と近代文学」P26では、「テクスト論の場合はある種の語彙というのがあって、それでよかったわけですけれども、書誌学の場合は書誌学語彙というものが必要となる理由がちがう。それが、それ以外の人たちにわかる語彙、ある程度共通の語彙でなければならない。そこがテクスト論と似ているようで違う。もっとも書誌学だって高度のテクスト論だと思うんです。作者なんていらないという気もします」とある。

[40] 同前掲グレアム・ロー／森田典正論文P35

[41] 同前掲グレアム・ロー／森田典正論文P52

[42] 同前掲グレアム・ロー／森田典正論文P52

2. 40 年代の朝日新聞連載小説の詳細

本論文で取り扱う研究材料をまず、以下の代表的な 13 篇の長編小説に限ることにした。それは、昭和女子大学国文学研究室が丁寧に検証した「新聞小説の年表—朝日・毎日・読売三新聞」、及び浅井清の「漱石と新聞小説」[43]を対照しながら、慎重に考慮した結果である。本来、明治 40 年代を目安に朝日新聞小説を研究するなら、「新聞小説の年表—朝日・毎日・読売三新聞」に書いてある 46 篇の小説の全てを研究材料として取り扱うべきであったが、それをもれなく収集することは、現段階では困難のため、取りあえずここでは先行論究の浅井清の「漱石と新聞小説」で触れられている現代でも名が残っている作家の代表作ともいいうる 13 篇の長編小説に限定することにした。その明細をリストにすると、次のようになる。

表(一) 明治40年代朝日新聞長篇連載小説の一覧

通番	作品名	作者	発表時間	章立て
1	『虞美人草』	夏目漱石	明治 40.6.23-40.10.29	一～百二十七。127 回の連載[44]。
2	『平凡』	二葉亭四迷	明治 40.10.30-40.12.31	一～六十一。61 回の連載[45]。「二葉亭が申します」で終わる
3	『坑夫』	夏目漱石	明治 41.1.1-41.4.6	一～九十六。83 回の連載[46]。
4	『春』	島崎藤村	明治 41.4.7-41.8.19	一～百三十五。135 回の連載[47]。
5	『三四郎』	夏目漱石	明治 41.9.1-41.12.29	一～百十七。117 回の連載[48]。
6	『煤煙』	森田草平	明治 42.1.1-42.5.16	一～三十四
7	『それから』	夏目漱石	明治 42.6.27-42.10.14	一～百十。110 回の連載[49]。

[43] 一覧表を作成するに当たって、昭和女子大学国文学研究室(1982)「新聞小説の年表——朝日・毎日・読売三新聞」日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書日本近代文学の書誌明治編』有精堂P205、浅井清 (1994)「漱石と新聞小説」宗田安正編『朝日新聞記者夏目漱石』立風書房P46-57を参照した。

[44] (1994)最新版『漱石全集』第4巻岩波書店P521

[45] (1971)『日本近代文学大系4二葉亭四迷集』角川書店P222。なお、同書のP222では、「新聞初出、初版とも二十三回を二十四回に誤り、以後回数が一回ずつずれて最終章が六十二回になっている」と畑有三は注釈を付け加えている。

[46] (1994)最新版『漱石全集』第5巻岩波書店P692

[47] (1987・初版1970)『日本近代文学大系14島崎藤村集Ⅱ』角川書店P50

[48] 同前掲『漱石全集』第5巻P697

[49] (1994)最新版『漱石全集』第6巻岩波書店P681

8	『冷笑』	永井荷風	明治 42.12.13-43.2.28	一さびしき人、二蟲の音、三樂屋裏、四深川の夢、五二方面、六小酒盛、七正月の或夜、八京都だより、九船の人、十冬の午後、十一車の上、十二夜の三味線、十三都に降る雪、十四梅の主人、十五珍客。78 回の連載[50]。
9	『門』	夏目漱石	明治 43.3.1-43.6.12	一～百四。104 回の連載[51]。
10	『土』	長塚節	明治 43.6.13-43.11.17	一～二十七
11	『徽』	徳田秋声	明治 44.8.1-44.11.3	一～七十九
12	『彼岸過迄』	夏目漱石	明治 45.1.1-45.4.29	「彼岸過迄に就て」「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」「結末」。109 回の連載[52]。
13	『生霊』	正宗白鳥	明治 45.5.1-45.7.25	一～十九。85 回の連載[53]。

上の表にある 13 篇のうち、『冷笑』と『彼岸過迄』の 2 作には具体的にタイトルが付けてある以外、他の作品では、漢数字で章立てがしてある。

また、現代ではあまり考えられないことであるが、新聞社が発表回数表記を間違えて掲載した例が、『平凡』に見られる。明治 40 年 11 月 22 日に掲載された『平凡』の 23 回には、誤って「二十四」と回数表記が付けられ、以下最終章の 61 回までの回数表記が本文の回数表記より一回ずつ多い表記となっており、最終章は「六十二」で終わっている[54]。こういったことから、当時、新聞小説の校正などのシステムがまだしっかりと出来ていなかったことが分かった。このようなことは、漱石の晩年の小説を掲載した時期[55]まで続いている。新聞に正誤表を出したり[56]、レイアウトなどの構成に問

[50]「後記」(1964)『荷風全集』第4巻岩波書店P489

[51] 同前掲『漱石全集』第6巻P684

[52] (1994)最新版『漱石全集』第7巻岩波書店P401では、108回となっているが、明治45年1月1日に発表した「彼岸過迄に就て」を入れて計算すると、109回になるはずである。

[53] 「解題」(1983)『正宗白鳥全集』第3巻福田書店P534

[54] 同前掲『日本近代文学大系4二葉亭四迷集』P263

[55] 同前掲「座談会出版と近代文学」P20では、十川信介は「小説にしても、斎藤緑雨」の初期のものにはしょっちゅう訂正記事が載っていますが、漱石の晩年の小説には、彼が校正にすごく不満を持っていたのに訂正は載らない。単行本で直せばいいと思ったんでしょうかね」と発言している。

[56] 同前掲「座談会出版と近代文学」P20では、高橋世織は「新聞も正誤表をだしていた頃があった」と指摘している。

題を残したり[57]するのも、当時の新聞小説掲載ではよく見られることである。

そして、新聞連載小説とはいえ、必ずしも毎日、小説が連載されたわけではない。例えば、明治40年11月3日に掲載された『平凡』五に続くはずの『平凡』六は、11月3日が天長節のために、4日に新聞が休刊となっており、11月5日に繰り下げて掲載された[58]のである。そして、『坑夫』のように、新聞社の都合により、休載した[59]こともある。これは、遠藤祐が述べているように、政治、経済、社会面の報道、解説を優先にした当時の新聞社が持つ方針[60]によったとも考えられよう。

当時の新聞には前述のような不備な点が多々あるにしても、小説が公共的役割の強い新聞に掲載されることは、小説家としては知名度が高まり一番のステータス[61]となったことは、まず間違いはなかろう。

3.明治40年代朝日新聞連載小説のエクリチュール(écriture)

以上、新聞小説の概況に触れたところで次に、本論文でいうエクリチュール(écriture) [62]について述べておきたい。エクリチュールとは、ロラン・バルトが『零度のエクリチュール』で定義した概念に即したもので、ロラン・バルトは以下のように述べている[63]。

> 言語体と文体はオブジェだが、エクリチュールは機能である。すなわち、エクリチュールは想像と社会との間の関係であり、社会的用途によって変形された

---

[57] 同前掲「座談会出版と近代文学」P23では、紅野謙介は「新聞というメディア自体にサイズといいレイアウトといい、構成上の問題があるんじゃありませんか」と触れている。

[58] 同前掲『日本近代文学大系4二葉亭四迷集』P231

[59] 同前掲『漱石全集』第5巻P692

[60] 同前掲遠藤論文P17では、「当時の新聞社ではやはり政治、経済、社会面の報道、解説が優先して、学芸関係への社としての目くばりは、まだ充分ではなかった状況を知ることができる」とある。

[61] 同前掲「座談会出版と近代文学」P18では、高橋世織は「小説を新聞に連載できるのは小説家として一番ステータスという感じになる」と指摘している。

[62] エクリチュールは解釈学では、特権性を持つものである。現象学・解釈学研究会編(1988)高橋哲哉「テクストの解釈学エクリチュール・モデルの意味するもの」『現象学と解釈学(上)』世界書院P186では、「「テクスト」が書かれたもの、すなわち「エクリチュール」(écriture)であることもまたおのずから明らかである」とある。さらに、そこではガダマーの「実際、すべてのエクリチュールは優先的に解釈の対象である」という言葉と、リクールの「解釈学はテクスト釈義、すなわちエクリチュールによって固定された生の表現の解釈と特権的に関係している」という言葉を引用して、解釈学の立場が表明されている。

[63] ロラン・バルト著渡辺淳・沢村昂一訳(1985・初版1971)『零度のエクリチュール』みすず書房P16

文語であって、人間的意図においてとらえられ、こうして歴史の大きな危機にむすばれる形式なのだ。

エクリチュールは「社会的用途によって変形された」文語の関係の「機能」であるというところに、バルトが捉えた文学言語の端的な性格の一つが示されている。この論説について、小森陽一は、エクリチュールは「現代フランスの思想家たち、ロラン・バルトやジャック・ラカン、ジュリア・クリステヴァやジャック・デリダ等が、日常的には書きことば、書かれた文字、書かれたもの、書くこと、筆跡などを意味する」[64]と締めくくり、さらにその作用を「徹底して概念的に拡大し、それまでの世界認識の構造転換をはかろう」[65]とする所にあると評価している。

こうした指摘にのっとり、19 世紀のフランスの新聞小説を分類した小倉孝誠[66]の論に倣って、現時点で分かった明治 40 年代朝日新聞に連載された 13 篇の長編小説の様々なエクリチュール（文学言語の社会的歴史的な関係機能）を大まかに以下の 5 点に纏めることにした。

(1)立身出世の夢を抱いて東京に出たが、夢が叶わなかった男の物語が中心となっている

この時期の朝日新聞連載小説は地方から学問や立身出世のために、東京へやって来た男の物語がほとんどである。何故、「東京」で出なければならなかったかについては、『平凡』(二十三)が適切に言い当てていると思われる。それを引用しよう。

> 東京は如何な處だか人の噂に聞く許で能くは知らなかつたが、私も地方育ちの青年だから、誰も皆思ふやうに、東京へ出て出處のか學校へ入りさへすれば、黙つてゐても自然と運が向いて來て、或は海外留學を命ぜられるやうになるかも知れぬ。若し然うなつたら、・・・・と目を開いて夢を見てゐたのも昨日や今日の事でないから、何でも角でも東京へ出たいのだが、(下線部分論者による。)[67]

---

[64] 小森陽一(1988)『語りとしての構造』新曜社P466

[65] 同前掲小森書P466

[66] 同前掲小倉論文P56では、小倉孝誠は19世紀フランスの新聞小説を「海洋小説」、「暗黒小説」「歴史小説」、「風俗小説」の四種類に分類した。

[67] 同前掲『日本近代文学大系4二葉亭四迷集』P263

『虞美人草』の小野、『平凡』の「私」[68]、『春』の岸本、青木、『三四郎』の三四郎、『煤煙』の小島要吉[69]、『黴』の笹村[70]、『彼岸過迄』の敬太郎の登場人物は、皆それに当たる。勿論、『坑夫』の主人公のように、相当な地位のある家の息子でありながら、恋愛に関わる込み入った事情のため生家の「東京」から飛び出して、坑夫になって五ヶ月後に東京に戻ったという、都落ちのケースもあれば、『それから』の平岡が一度京阪に就職に行ったが、失敗して再び東京に戻ったり、『門』の東京出身の宗助が三角関係にいる友人の安井を裏切った後で、漂泊の旅をしてから東京に落ち着いたりする話しもあるが、それらも東京を結局は拠点としている点で、上京する主人公たちと同類であると言える。ここからは、地方出身の人が東京を羽ばたく場としている同時代での志向が読み取れると言えよう。また、これらの物語群の筋のほとんどは、「東京」の都市空間を中心に進展している。この点において言えば、都市の「東京」とは違った農村を背景にして描かれた『土』が特異に見える。『土』は、発表当時、漱石によって激賞された[71]とはいえ、東京を場所設定にした明治 40 年代朝日新聞連載小説のエクリチュールからすると、読者の馴染みのない農村に設定したことから生じた違和感が、その不評[72]を引き起こした原因の一つと考えられよう。

また、作品群を人物別に見れば、銀時計をもらって優秀な成績で学校を卒業したエリートの『虞美人草』の小野は、順調に立身出世のコースに乗っていると言えるが、その他の登場人物は、立身出世のコースから外れた人ばかりである。九州の田舎から大学に入ったばかりの修業中の三四郎、平凡な成績で大学を卒業し、就職活動に焦っている敬太郎を除いて、地方出身の『平凡』の「私」、『春』の青木、『煤煙』の要吉、『黴』の笹村の4人だけは、東京で定職を得ている[73]。しかし、人生の半ばを過

---

[68] 「平凡」(一)では、主人公の「私」が三十九才の役所勤めで、何か異変があったら、妻子が困らない程度の貯金を持っていない人物に設定されている。

[69] 要吉は十四歳から東京へ勉強に出され(「煤煙」(二))、去年の夏大学を卒業した(「煤煙」(一))とされている。

[70] 「黴」の物語が笹村が東京で家を持つあたりから始まる。「黴」(二)では、「笹村は旅から歸つたばかりで、家を持つについて何の用意も出來なかつた。笹村は出京當時世話になつたことのある年上の友達が高等文官試験を受けるとき、(後略)」とある。

[71] 明治43年6月9日『東京朝日新聞』に、漱石は「長塚節氏の小説「土」」を書いて発表したP237-239。また「土」が単行本として出版する際、明治45年5月15日に「『土』に就て－永長塚節著『土』序－」を書いた。(1975・1967初版)『漱石全集』第11巻岩波書店P237-239、P588-594を参照されたい。

[72] 佐々木靖明(1999)「『長塚節』編解説」『作家自伝84長塚節』日本図書センターP244

[73] 『春』の岸本は、作品中女学校の教師を辞めて放浪の旅から東京に戻っていると設定されているため、定職に就いているとは言えない。

ぎて 39 才の『平凡』の「私」は、役所勤めをしながらも、家族に困らせない程度の貯蓄さえも持っていない。『春』の青木は、世帯持ちで、女子学校に勤める傍ら、雑誌編集などに携わっているが、自殺で命を絶った。『煤煙』の要吉は、女子教会学校で教師をしていて[74]、学生時代に引き続いて、同じ郷里から出た者の世話になって生活をしている。大学を出たにしても、一戸を構えて独立的に生活していない所を見れば、要吉の経済条件はそれほど恵まれているとは思われない。『黴』の笹村は文筆活動を糊口する手段にする類[75]であり、時には他人から金を借りることがあって、余裕のない生活[76]を送っている。

こういった地方出身の 4 人が東京での生活状況を見れば、到底エリートコースに乗っているとは思われない。東京に来た当初の夢とは大きな懸隔のある生活を送っている点において言えば、この 4 人も敗北者だと言っても過言ではない。

これには日露戦争のころから言われ出した「学士就職難」の社会問題[77]がその背景にあると思われる。それに、明治 40 年代は高等教育卒業者であっても、管理職にはつけず、下っ端の仕事から始めなくてはならないし、昇進までに長い時間がかかる、いわゆる高等教育出の腰弁[78]の現象は普通のことになっている。

一方、夢を抱いて地方から東京に出た男達と同じように、『生霊』には田舎から家族がいる東京に帰った一人の女性繁子がいる。「東京へ歸つたぐらゐなら、一年でも二年でも、名高い學校へ行つて見たいわ。それに音樂でも美術でも習つたら、女だつて一人立ちてで暮せるんでしょう」[79]と思った繁子は、父に「女が學問をして何に

---

[74] 「先生は記憶えてゐて下さいますか、金葉會で先生の一番始めの講義の時間に、白墨がなくて困つた被坐した時、私が隣の教室から取つて來て、先生のお側へ參かつたことを——外の者にさせないで私が持つて參りました」「煤煙」(十六)によって推測した。

[75] 「夜笹村は、かんかんランプに向つて、その頃書始めてゐた作物の一つに頭を集中しようとしてゐる。(中略)夜になると分明して來る笹村の頭は痛いほど興奮してゐた。筆を執るには、目がちかちかし過ぎるほど、神経が冴えてゐた」(「黴」十二)、「原稿の出來るのと、先生の死と——孰が先になるか、それは笹村にも解つてゐなかつた」(「黴」三十三)によって推測した。

[76] 「要吉は學生時代から少し宛は筆で稼いで、學資を補ふやうにしてゐたが、學校を出たその日から自分の腕一つで世に立つ他はなかつたのである」(「煤煙」二)、「少し手に入つた金で、手詰まりのをりにお銀が餘所から借りて來てくれた金を返さしたり(後略)」(「黴」十九)、「少し許りの金を袂の底に押込んで」(「黴」二十六)、「貧しく暮らしてゐる母親に、送るべきものも送れずに居た」(「黴」二十九)によって推測した。

[77] 竹内洋(1995)「教養知識人の運命—三四郎と実人生ー」小島信夫・小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第5号翰林書房P138

[78] 同前掲竹内洋論文P140

[79] テキストP357

なる?」[80]と反対されたばかりではなく、「嫁入り支度」[81]を勧められた。両親の勧めによって、見合い結婚をしたが、医者の主人が結婚前に犯した悪事が発覚しても、「結婚の後悔と死の希望」[82]を心に抱きながら繁子は離婚に踏み切れず、家に縛られた不幸な生活を送っている。夢を抱いて東京にやって来るという点では、上述の男達と変わりはないが、同時に、家の重圧によって不幸な結婚生活に耐えなければならないという運命を女性は背負っている。明治末期では、女性には新たな生き方を選択させる道はまだ閉ざされている。道が閉ざされるという点では、多くの男女の主人公や登場者にそうした状況が共通して見られるのである。

こうした一定した設定に明治末期新聞小説の対社会関係機能を見出すことができる。

(2)男性視点中心の第三人称の小説が殆どである

女性視点から描いた『生霊』と、第一人称の「私」で語った『平凡』を除いて、11 篇の作品は第三人称の小説であり、みな男性視点に立って語ったものである。明治末年より大正、昭和へかけての日本の庶民的女性の姿を彷彿とさせてリアリステックに浮彫りにし、日本の「女の一生」を描いた作家[83]であると賞讃されている徳田秋声ですらも、主人公の笹村の妻お銀の心理にはあまり入り込んで描写していない。たとえ、女性描写があるにしても、女性の内面世界に深く立ち入って描写されていないため、これら 11 作品での『虞美人草』の藤尾、『春』の勝子、『三四郎』の美禰子、『煤煙』の朋子、『それから』の三千代、『門』のお米、『土』のおつぎ、『黴』のお銀、『彼岸過迄』の千代子という女性達の行動は、時にはミステリーに包まれ、理解できない所がかなりある。これは男性視点偏重の小説群に女性の視点が欠けているためとも言えるし、それによって男性側から描かれた女性心理に限界が生じたのだとも言える。あるいは、そうした男女の差異が意識的にせよ、無意識的にせよ、断絶として浮かび上がらざるを得ないまでに社会意識の変化が進んでいたことの反映とも見られる。その点で、これら明治末期の新聞小説群の女性像は、興味深い問題を投げ掛けている。

以上、視点についても一定した対社会的関係が窺われる。

---

[80] テキストP358

[81] テキストP358

[82] テキストP443

[83] 徳田一穂(1967)「解説」『現代日本文学全集63徳田秋聲(二)筑摩書房』P420

(3)日常生活に浸透している新聞の特性が見られる

時事性を新聞小説作品の中に盛り込むことによって、リアリティーを生み出す手法は漱石の新聞小説が成功した理由の一つと見られている[84]。だが、この指標は他の作家の新聞小説にはあまり当てはまらない。この点において言えば、漱石が新聞小説で使った手法は極めてユニークで特異である。いわば、漱石は新聞連載期間ないしその前に起こった出来事を新聞小説に盛り込むという、新聞小説の新たな局面を切り開いたと言えよう。

一方、日常性という点では、新聞紙を紙として日常生活に使う描写が見られる。例えば、『黴』(六)の「翌日笹村は獨寢の小さい蚊帳を通で買つて、新聞紙に包んで抱へて歸つた」のように、読み捨てた[85]古い新聞紙を包装紙に活用する例もあれば、『煤煙』(八)の「枕頭には毎日の通り新聞が置いてある」また『生霊』(十一)「谷口(医者・論者注)」は行々病院を建てるまでの計画を話しながら起きあがったが、下女は食事拵へして待つてゐた。食卓の上に置かれる一枚の新聞は、興もなささうに一寸目を通したばかりで押しのけて、妻の給仕で朝餐を貪つた」のように、朝に新聞を読むのが習慣となっている例もある。これらの用例を見ると、新聞は情報伝達に用いられる手段というだけではなく、生活の便を図るために大きな紙として民衆が様々に活用していたことが窺える。メディアの市民への浸透という対社会的関係が浮かぶ。

(4)単純化された作品構造

『春』では登場人物が多い[86]代わりに、主人公岸本と副主人公青木との関係を中心に展開したストーリーとプロット[87]は、時間の進行に従って語る形で行なわれ、比

---

[84] 同前掲浅井清論文P52-54。吉田俊彦(1990)「新聞小説」三好行雄編『夏目漱石事典別冊國文學』學燈社P170

[85] 同前掲「座談会出版文化と近代文学」P11では、有山輝雄が「関東大震災後に、書物に対する関心が深まるというのは、それ以前は活字のものは仮のものであって、読み捨てされる。新聞なんか典型的にそうしたもので、保存すべきものだとか、あるいはそれ自体研究するものだという意識はなかったわけです」と発言している。

[86] 名を持って登場した人物はほぼ30名近くある。その中で『春』(八)では、話題にしか出て来ない人物「加藤さん」までも明記している。こんなに大勢の登場人物の名を覚えるのは、新聞小説の読者にとっては、苦労するものであろう。

[87] E.M.フォースター著中野康司訳(1994)『小説の諸相』みみず書房P43では、「ストーリーを「時間の進行に従って事件や出来事を語ったもの」と定義しました。プロットもストーリーと同じく、時間の進行に従って事件や出来事を語ったものですが、ただし、プロットはそれらの事件と出来事の因果関係に重点が置かれます」とある。

較的単純[88]であり、青木の自殺と岸本の関西漂泊の旅から仙台赴任までの経緯に集中している。『春』と同じように、時間の進行に従って一定した方向へ向かって物語が進む『虞美人草』、『坑夫』、『三四郎』、『煤煙』、『冷笑』、『土』、『徽』、『生霊』の8 作は、事件が起こった時間を前後にして再構成され、回想する形で語った『平凡』、また進行中の物語の中に一部分だけ過去の出来事を鏤めた『それから』、『門』、『彼岸過迄』と比べて、小説の構造はそれほど複雑ではない。

その中で、短篇連鎖の創作方法によって、新聞小説として面白く読まれたいという漱石の希望[89]が込められて、6つの短篇で書かれた重層的な作品構造を持っている『彼岸過迄』は他の 12 篇と比較して見ると、その独自性が一層目をひき、新聞小説の特徴として評価されている[90]。それと対照的に作品の冒頭に予告の形で物語を始めた『徽』について、佐々木徹は連鎖プロットの方法に近い方法[91]を取ったが「短篇を不規則に繋ぎあわせた長篇小説」[92]で、「不規則に時間を前後させながらたどたどしく綴っていくのである。決して読み易い作品ではない」[93]とその欠点をあげている。

こういった重層的作品構造を持つ『彼岸過迄』に似ているのは『虞美人草』の手法である。そこでは、違う母の生んだ妹の藤尾がいる東京に京都の旅から帰った宗近と甲野と、京都から東京に小野を頼りにやって来た小野の婚約者の小夜子親子が東京駅で落ち合ったことを「四個の小世界は停留場に突き當つて、しばらく、ばらばらとなる」(『虞美人草』七)と書いて、東京での物語の正式な始まりを複線的に展開させていく。同時に複数のブロックを展開させて一つに合流する形は、『彼岸過迄』のような重層的作品構造の先駆けとも考えられよう。作品の構成の点では、漱石の作品には他にはない様々な工夫が見られ、その点が際立っていると言える。

小説構成の変化という対社会的関係も読み取ることができる。

---

[88] 『春』(百二十)、(百二十五)の二箇所に、「追想」と明示して、過去を回想している。

[89] テキストP7

[90] 同前掲吉田俊彦論文P171では、この『彼岸過迄』の持つ対照的かつ重層的な認識構造を高く評価している。

[91] 福田清人編佐々木徹著(1988・1966初版)『人と作品41田秋声』清水書院P143

[92] 同前掲福田清人編佐々木徹著書P142

[93] 同前掲福田清人編佐々木徹著書P142-143

(5)弱い文学[94]と見られる日本の風土の中で際だつ理念や思想偏重の小説

グレアム・ロー／森田典正の論では、モレッティーが近代小説の挫折を嘆く柄谷行人と三好行雄を引用して、日本を弱い文学・文化圏に位置づけ、その一方でロシアの思想小説を稀に見る成功した例として挙げていると述べている[95]。近代文学の評価については、果たして柄谷行人と三好行雄のこのような評が正しいかどうかは分からず、弱い文学・文化圏と強い文学・文化圏とがあるというようなモレッティーの二分法が果たして世界の全ての文学に当てはまるのかどうか、論者には断定する材料がないが、明治 40 年代の新聞小説群には、文明批評・人生観が鏤められた『冷笑』、文学観を積極的に表明しようとした『平凡』、『煤煙』、農民小説としての『土』があり、成功作か失敗作かは別として、確かに明治 40 年代の新聞小説にこうした思想的格闘を示す作品があることは、事実として忘れてはならない。

また、漱石の一連の作品にも、そうした思想としての文学を見ることは可能であり、今回の論及の対象からは外れるが、新聞小説に限らなければ、鴎外の『妄想』[96]や他の作家の小説にも、同じ見方が可能であることを思うとき、エクリチュールの表出様式がロシアの思想小説と異なっているだけで、実は明治期の多くの作品の中でそうした様式でのエクリチュールを通して、思想的探求がなされていたと見ることも可能である。世界史的視野でメディアを見ると言うとき、その時代のエクリチュールそのものへ戻らない限り、空虚な言説が呪縛のように拡大して、文学のエクリチュールそのものへの接近を妨げてしまう文学研究の危機を、こうしたあまりにも「大きすぎる」論の傾向から、逆に作品自体を通して読み取ることは決して無駄ではあるまい。

小説内容という点でもエクリチュールという文学言語の対社会的関係が窺えるのである。

4. おわりに

明治 40 年代、朝日新聞連載小説を中心に明治末期の新聞メディアのエクリチュールの探究に筋道をつけることを目的とした本論文では、以上のように、新聞小説のエクリチュールに見られる特徴を 5 つに纏めることができた。エクリチュールは記号

---

[94] 同前掲グレアム・ロー／森田典正論文P53では、「脆弱にして不安定な産物。実現不可能な計画、失敗作・・・この他、弱い文学、弱い文化をどう形容したらいいのだろうか?」というモレッティの主張を引用している。

[95] 同前掲グレアム・ロー／森田典正論文P53

[96] 『妄想』は明治44年3月及び4月の雑誌『三田文学』に発表された作品である。

よりもさらにテクストに即した対社会的関係から浮かぶ小説言語の構造であり、ひいては対歴史的な関係である。しかし、これはあくまで、大まかな見取り図に過ぎず、13 篇の研究対象とした小説の本文の細部の分析を緻密に行って、その時代の新聞小説のエクリチュール自体を論究するのは、今後の課題である。多くの課題がまだ残されている中、とりわけ、本文細部の分析への補強ならびに社会的視点からの掘り下げ、および同時代の国際的な広がりから日本の新聞小説を見るような研究にアプローチすることを今後の課題としたい。

付録資料

表(二) 明治末期・大正期東京主要新聞推定発行部数

	1903 年	1907 年	1914 年
報知新聞	83,395	175,000	24 万
国民新聞	18,000	34,000	19 万
東京朝日	73,800	81,000	12 万
万朝報	87,000	87,000	10 万
時事新報	41,500	41,000	6 万
東京毎夕	—	6,000	19-21 万
二六新報	142,340	60,000	5 万
都新聞	45,000		3 万
東京日日	11,700	24,000	11-12 万
読売新聞	21,500	32,000	—
中央新聞	41,000	35,000	11-12 万
東京毎日	—	24,000	3 万
日本	10,000	27,000	3 万
大阪朝日	104,000	—	35 万
大阪毎日	92,355	—	33 万

(有山輝雄(1995)「明治末期の新聞メディアと漱石」小島信夫・小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第 5 号翰林書房 P88 より引用)

本論文於 2007 年 12 月 24 日通過審查。

テキスト

(1955)『現代日本文學全集 22 寺田寅彦森田草平鈴木三重吉集』筑摩書房
(1964)『荷風全集』第 4 巻岩波書店
(1975・初版 1966)『漱石全集』第 3 巻岩波書店
(1975・初版 1966)『漱石全集』第 4 巻岩波書店
(1975・初版 1966)『漱石全集』第 5 巻岩波書店
(1967)『現代日本文學全集 63 徳田秋聲集(二)』筑摩書房
(1987・初版 1970)『日本近代文学大系 14 島崎藤村集Ⅱ』角川書店
(1971)『日本近代文学大系 4 二葉亭四迷集』角川書店
(1984・初版 1978)『筑摩現代文学大系 7 正岡子規高濱虚子長塚節石川啄木集』筑摩書房
(1983)『正宗白鳥全集』第 3 巻福武書店

参考文献Ⅰ、日本語関係

1.吉田精一(1976・初版 1955)『自然主義の研究』上巻東京堂
2.吉田精一(1976・初版 1958)『自然主義の研究』下巻東京堂
3.福田清人編佐々木徹著(1988・初版 1966)『人と作品 41 徳田秋声』清水書院
4.福田清人編佐々木徹著 (1993・初版 1967)『人と作品 24 正宗白鳥』清水書院
5.ロラン・バルト著渡辺淳・沢村昂一訳(1985・初版1971)『零度のエクリチュール』みすず書房
6.日本近代文学館編(1977)『日本近代文学大事典』第 1 巻講談社
7.朝日新聞社編(1979)『朝日新聞 100 年の記事にみる①』朝日新聞社
8.山本武利(1981)『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局
9.日本文学研究資料刊行会編(1982)『日本文学研究資料叢書日本近代文学の書誌明治編』有精堂
10 内川芳美・松島栄一監修(1986)『明治ニュース事典明治 41 年－明治 45 年』第 8 巻毎日コミュニケーション
11W. リップマン著掛川トミ子訳(2005・初版 1987)『世論』下岩波書店
12W. リップマン著掛川トミ子訳(2006・初版 1987)『世論』上岩波書店
13 小森陽一(1988)『語りとしての構造』新曜社
14 現象学・解釈学研究会編(1988)『現象学と解釈学(上)』世界書院

15(1989)『國文學』第 34 巻 8 号學燈社
16三好行雄編(1990)『夏目漱石事典別冊國文學』學燈社
17 天野郁夫(1996・初版 1992)『学歴の社会史－教育と日本の近代』新潮社
18 長谷川泉監修(1993)『近代作家研究叢書 145 正宗白鳥—文学と生涯—』日本図書センター
19(1993)『文学』第 4 巻第 2 号岩波書店
20(1993)『文学』第 4 巻第 1 号岩波書店
21(1994)『文学』第 5 巻第 3 号岩波書店
22 宗田安正編(1994)『朝日新聞記者夏目漱石』立風書房
23E. M. フォースター著中野康司訳(1994)『小説の諸相』みみず書房
24 小島信夫・小森陽一・石原千秋編(1995)『漱石研究』第 5 号翰林書房
25 ベネディクト・アンダーソン著白石さや・白石隆訳(2006・初版 1997)『増補想像の共同体』NTT出版
26(1998)『文学』第 9 巻第 1 号岩波書店
27(1999)『文学』第 10 巻第 1 号岩波書店
28(1999)『作家自伝 84 長塚節』日本図書センタ
29(2000)『文学』第 1 巻第 1 号岩波書店
30山田俊治(2002)『大衆新聞が作る明治の<日本>』日本放送出版協会
31 小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵藤裕己・松浦寿輝編(2002)『岩波講座文学 2 メディアの力学』岩波書店
32(2003)『文学』第 4 巻第 1 号岩波書店
33(2003)『文学』第 4 巻第 2 号岩波書店
34(2006)『國文學』第 51 巻第 5 号學燈社
Ⅱ、中国語関係
1.陳固亭(1971)『日本新聞史』中華叢書編審委員會
2.李明水(1987・1980 初版)『日本新聞傳播史』大華晩報

本論文は、2006 年 11 月 4 日に台湾大学文学院日本語文学系によって開催された「2006 年台大日本語文創新国際学術研討会」での口頭発表を書き改めて作成したものである。

【日本語要旨】

明治の西洋化に伴い、文明開化の象徴として新聞メディアは、日本に伝わってきた。新聞をはじめ、テレビ、インターネットが発達している 21 世紀の現在でも、マスメディアの功罪が度々取り上げられ、議論されている。まして、新聞が唯一の共有機関紙として情報を流通、交換する手段だった明治時代においては、新聞メディアが持つ力は、現代を生きている現代人の想像を遙かに超えて、強大である。

日本の新聞発展史を振り返ってみると、朝日新聞社は最初、小新聞だったが、明治 41 年に東京朝日と大阪朝日を合併した朝日新聞は、全体として東京大阪の二大都市で発行体制をもつ当時最大の新聞社になった。その中で、二葉亭四迷、漱石を招聘した池辺三山の改革により、新聞連載小説の第一次黄金時期を迎えたのである。

先行論究では、文学概念の変革や民族国家に依存しないアイデンティティとせめぎあう近代像など、様々な角度から新聞小説を研究する方向が示唆されている。本発表では、まず明治 40 年代の朝日新聞に連載された 13 篇の新聞連載小説を中心に新聞小説のエクリチュールを分析、比較、対照する、見取り図を明らかにする。

【キーワード】

新聞メディア　明治 40 年代　朝日新聞社　新聞小説　エクリチュール